アフリカにおける穀物増産を目指して（要旨）

広大な土地と人口を持つアフリカは、これまで大きな経済成長を見せることなく、貧困や飢餓など多くの問題を抱えてきた。2003 年以降、鉱物資源の価格高騰に伴って資源輸出国の一人当たり GDP は上昇してきているが、資源輸出だけで全ての国民が貧困や飢餓から抜け出すことは不可能である。ではアフリカの経済発展のために一番重要な分野は何か。それは農業である。しかし、アフリカの農業は特に穀物生産において大きな問題を抱えており、それが発展を妨げている。貧困問題や今後の人口増大に対応するためには、アフリカにおいても、アジアで起きた緑の革命のような穀物増産改革を行う必要があると考えられる。そこで本論では、最新の統計データとアフリカにおける穀物増産政策の事例の検討によって、穀物生産の問題点を分析し、それを解決するためにアフリカ各国政府はどのような政策をとるべきか、先進国や国際機関はどのような支援をしていけばよいのかを示す。

アフリカの穀物生産の問題とは、増え続ける穀物需要に対し生産が追い付かず、貴重な外貨を使ってその消費量の一部を輸入に頼っていることである。特にサブサハラアフリカは、2009 年には米の消費量の 29％を、小麦の消費量の 71％を輸入に頼っている状況である。サブサハラアフリカは平均して約 54％以上の人が農業に携わっていながら、主食である穀物を自給出来ていない。

本論では、この問題の要因として低い生産性に着目した。特に 1980 年から 2000 年にかけての 20 年間は、サブサハラアフリカでは面積当たり生産量はわずかしか増加せず、これはこの時期急激に穀物生産量を伸ばしたアジアと対照的であった。更に最新の統計データの分析から、2000 年代に入り、生産性は以前より大きく向上したものの地域差があり、サブサハラアフリカの国々の多くは未だ生産性が低いことがわかった。その原因として、灌漑設備が整っていない、肥料投入量が少ないという問題が考えられる。更に、生産性の向上を妨げる要因として、交通インフラ設備が整っていないという問題がある。

次にその改善策を考えるために、マラウイでのメイズ増産政策、SG2000 笹川アフリカ協会の取り組み、ウガンダでのネリカ米普及策の三つの事例を取り上げた。その考察の結果、アフリカの穀物生産量を上げるには、種と技術の伝達、灌漑設備の整備、肥料の投入、倉庫や流通インフラ整備が必要であることが確かめられた。更に、増産支援のプロジェクトを実施する上では、地域性をよく把握し各地の零細農民にも効果が行き渡るような手法をとることが重要であり、それがプロジェクトの成否を左右することがわかった。

以上の分析、事例の検討から、アフリカの穀物生産の問題には、自然条件だけでなく政策が大きく影響しており、アフリカ諸国政府の政策次第で、穀物の増産は実現できるという可能性が導き出された。しかしアフリカ諸国政府だけでは財源に限りがあることから、NGO や国際機関などが資金面、技術面において協力をし、生産性の向上と穀物の貯蔵や流通などあらゆる面から穀物増産を目指していくべきである。